

埼玉県文化財収蔵施設保管の石器

— 荒神脇遺跡出土の石器 —

西井幸雄

要旨 荒神脇遺跡は1972年に埼玉県遺跡調査会が主体に発掘調査が実施され、1974年に報告書が刊行されている。埼玉県において旧石器時代の発掘調査事例が多くなるのは、1970年代後半から80年以降のことで1970年代初頭では貴重な事例である。しかし、当該地域のローム層の堆積が薄く、後世の遺構覆土中などから発見される場合が多く、遺物の出土層位が明確な遺跡は少ない。本資料も「その他の出土遺物」として記載されており、遺物実測図及び写真は掲載されていない。

埼玉県文化財収蔵施設に保管されている荒神脇遺跡の石器を実見・実測をする機会があり、武蔵野台地・大宮台地と比べ当該地域の遺跡の調査事例は少ないことから、実測図を掲載し紹介する。

はじめに

荒神脇遺跡は埼玉県遺跡調査会によって、昭和47年（1972年）に発掘調査が実施され、1974年に埼玉県遺跡調査会報告第22集として刊行された。報告書にはその他の出土遺物として「ナイフ形石器2（粘板岩1、黒耀石1）フレイク1」と記載されているが、実測図及び写真は掲載されていない。その為、遺跡集成等で所在地と遺跡名、器種、石材等明記されていたが、遺物の詳細は不明であった。

今回、埼玉県文化財収蔵施設に保管されている当該石器を紹介する。

1. 荒神脇遺跡（第1図）

荒神脇遺跡は熊谷市野原、旧江南町に所在する。位置は北緯36°06'13"、東経139°22'03"（世界測地系）で標高は50m前後である。

遺跡の立地する江南台地は、外秩父山地から東側に突き出た台地で、北側は荒川低地と櫛引台地が、南側は比企丘陵がある。台地は北を荒川・和田吉野川、南を吉野川に挟まれた東西17km、南北3kmの長方形を呈しており、標高は西側の寄居町付近は140mを測り、東端は50m前後である。

近隣の遺跡は、1973年に山内幹夫が『史峰』第2

号に「比企丘陵北部発見の先土器時代資料の紹介」の中で、隣接する立正大学校構内サッカー場（2）採集のナイフ形石器を紹介している。その後も立正大学の学生によって当該地域の分布調査が行われ、1978年に上野川勝・城前喜英・宮田栄二が『いにしえ』2号に「埼玉県大里郡江南採集の先土器時代資料」にまとめられている。

発掘調査は、1994年に立正大学熊谷校地遺跡のX地点として鹿嶋遺跡（3）が調査された。遺物はハードローム層（報告書では層状から第2暗色帯の上層に対応）から石器集中が検出された。石器はナイフ形石器等が出土し、石器石材は黒耀石が多く用いられている。時期は武蔵野台地の第VI層から第VII層に対応するものと考えられ、江南台地では最も古い石器群である。

塩西遺跡（6）は和田川の南側、比企丘陵との境付近に位置する。発掘調査は1983年にD地区、1987年にA・B・C地区が江南町教育委員会によって実施された。旧石器時代の遺物は、C地区とD地区から見つかっている。C地区はナイフ形石器を含む黒耀石製の石器集中1箇所が検出されている。D地区は頁岩製の石器群がハードローム層下部から出土しており、D→C地区の時間的推移が見られる。他に

ナイフ形石器が出土した遺跡は、向原遺跡と萩山遺跡が挙げられる。

以上、周辺の遺跡で荒神脇遺跡との関連が検討される。また、他に槍先形尖頭器等旧石器時代終末期の遺跡が多い。

2. 荒神脇遺跡出土の石器（第2図）

石器は3点である。遺物には「荒表」と注記されており、荒神脇遺跡の資料であることは明らかである。また、「その他の出土遺物」で器種、石材、点数が記載されており、資料との照合が容易であった。

1（第2図1） 透明度の高い黒耀石製のナイフ形石器である。報告書記載でナイフ形石器の黒耀石製とされている。

外形は、先端及び基端を若干欠損するが、左右対

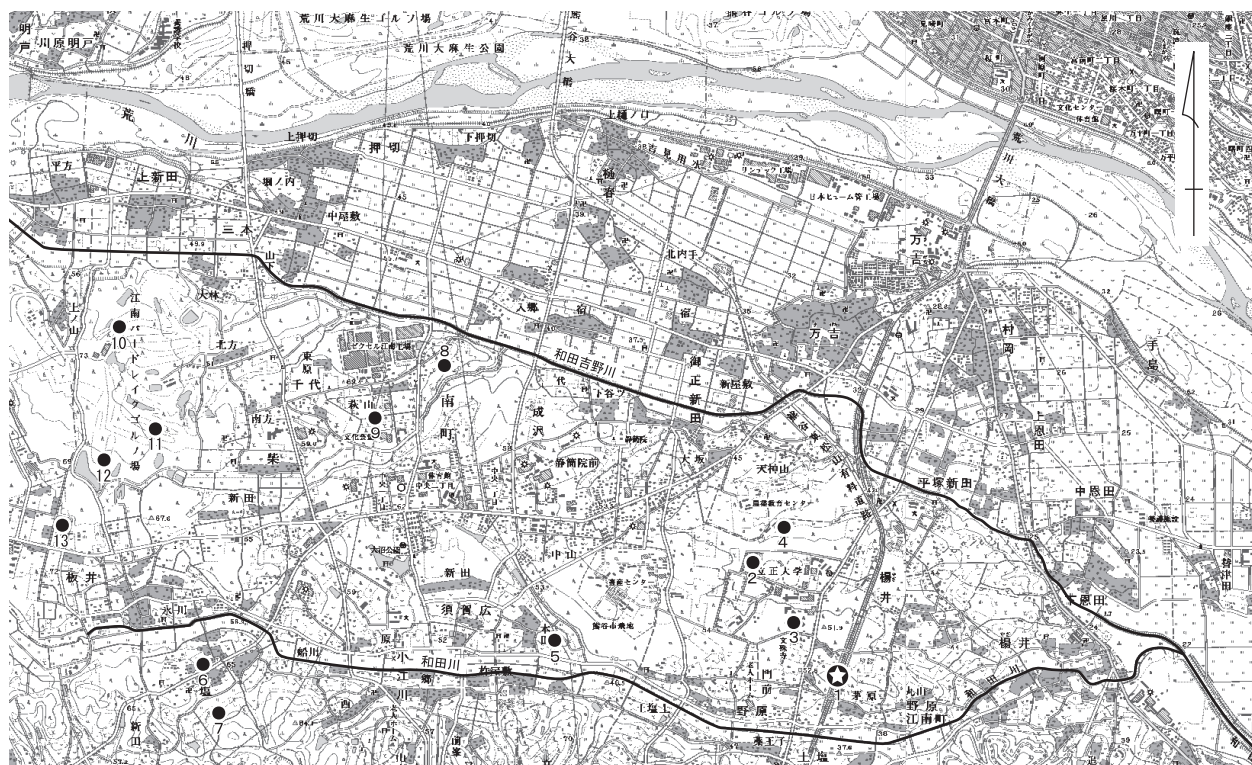
称の槍先状である。刃部は右刃で基部の長さの半分程度である。

大きさは現況で長さ2.5cm、幅1.05cm、厚さ0.45cm、重さ0.8g、先端角58°、側刃角139°である。

素材剥片は下位方向からの縦長剥片を用いており、正面の1次剥離面は、主要剥離面とほぼ同じ方向の2枚の剥離面によって構成されている。

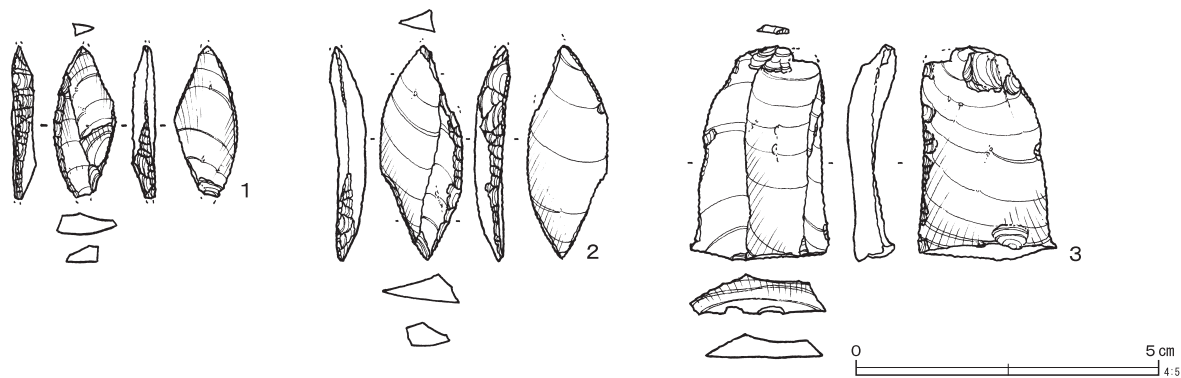
調整加工は、左側縁は基端から先端、右側縁は基端から下半部に施された二側縁加工である。基端部は欠損しているが、両側縁からの調整加工によって尖頭状であったと思われる。

2（第2図2） チャート製のナイフ形石器である。報告書ではナイフ形石器の粘板岩とされているが、実見すると、刃部の縁辺の薄い部分が乳白色に透けており、色調が黒に近いチャートと判断した。



- | | | | | |
|-----------------|-----------|---------|---------|---------|
| 1 荒神脇遺跡 | 4 向原遺跡 | 7 塩丸山遺跡 | 10 西原遺跡 | 13 天神遺跡 |
| 2 立正大学熊谷構内サッカー場 | 5 本田・東台遺跡 | 8 上前原遺跡 | 11 山神遺跡 | |
| 3 鹿嶋遺跡 | 6 塩西遺跡 | 9 萩山遺跡 | 12 寺内遺跡 | |

第1図 遺跡位置図（S = 1 / 50,000）



第2図 荒神脇出土の石器

外形は、平行四辺形に近い形状を呈している。刃部は左刃で、基部の長さの2/3近くを占めている。大きさは、長さ3.5cm、幅1.35cm、厚さ0.6cm、重さ2.1g、先端角56°、側刃角150°である。

素材剥片は上位の縦長剥片を用いており、正面の1次剥離面は、主要剥離面を同一方向と180°逆方向の剥離面で構成されている。

調整加工は、右側縁は基端から先端、左側縁は基端から下半部にかけて施された二側縁加工である。

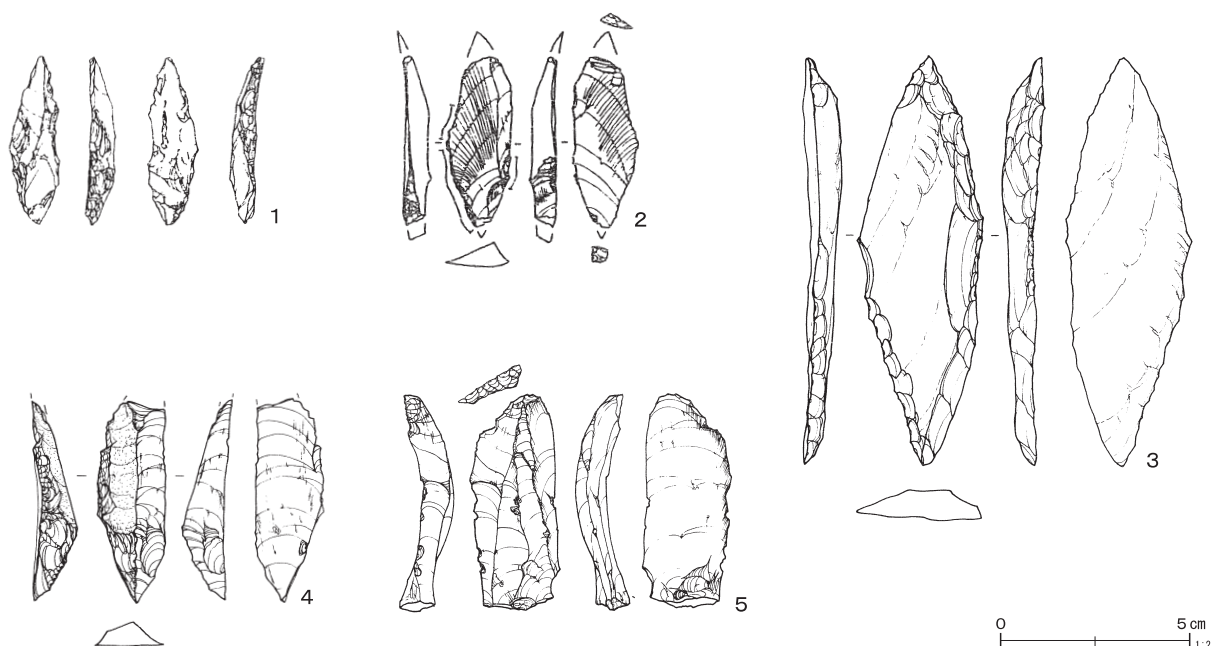
右側縁の調整加工は、先端から約1.5cmの部分で、剥離面が大きくなり、側縁のラインも不自然に直線

状になっている。また、対応する刃縁部に使用によると思われる微細な剥離が裏面側に観られる。先端部の欠損等による再加工が施されたと考えられる。

基端は両側縁調整加工が鋭利に交差し尖頭状を呈している。

3（第2図3） 透明度の高い黒耀石の剥片である。報告書記載はフレイク1となっている。ナイフ形石器と一緒に保管されている点や、剥離面の一部にロームの付着がみられることから、報告書記載の剥片と考えられる。

外形は両側縁が平行する縦長剥片で、先端部を裏



第3図 周辺の遺跡出土のナイフ形石器

面方向からの力で折り取られている。横断面は台形を呈している。

打面は一部欠損するが、単剥離面と思われる。右側縁の裏面側に微細な剥離が観られ、石刃等として使われたと考えられる。

大きさは現況で長さ3.5cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、重さ4.7gである。

3. 周辺の遺跡出土のナイフ形石器（第3図）

1は立正大学熊谷校地サッカー場で採取された。大きさは長さ4.4cm。外形は平行四辺形を呈する二側縁加工のナイフ形石器である。

2は塩西遺跡から出土したナイフ形石器である。石材は黒耀石製、大きさは現況で長さ4.4cm、幅1.6cm、厚さ0.6cmで、基部を中心に調整加工が施されている。

3～5は立正大学熊谷校地の鹿嶋遺跡から出土している。3は黒色頁岩製の大型のナイフ形石器で長さ10.75cm、幅3.4cm、厚さ1.0cmの二側縁加工であ

る。4と5は黒耀石製である。4は上半部を欠損している。調整加工は右側縁のみに施されている。5は先端を斜めに切断するように調整加工が施されている。2と3～5は出土層にとって時期が限定できる。2の塩西遺跡C区は硬質ローム層の上部から、3～5の鹿嶋遺跡はハードロームの暗黄褐色土層から検出された。現場での土層観察において、乾燥するとクラックが入ることから、武蔵野台地の第2暗色帯に対応すると考えられる。

おわりに

以上、荒神脇遺跡出土のナイフ形石器と、周辺の遺跡から検出されたナイフ形石器を概観した。鹿嶋遺跡のナイフ形石器は、出土層位から武蔵野台地の第Ⅵ～Ⅶ層に対比され、他は第Ⅳ層の範囲に収まると考えられる。

荒神脇遺跡と立正大学熊谷校地サッカー場採取のナイフ形石器は、外形・素材剥片・調整加工から砂川期から終末期の所産と考えられる。

引用・参考文献

- 江南町史編さん委員会 1995 『江南町史資料編1 考古』江南町
上野川勝・城前喜英・宮田栄二 1978 「埼玉県大里郡江南採集の先土器時代資料」『いにしえ2』古代文化研究会
埼玉県遺跡調査会 1974 『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第22集
松原典明 1995 「立正大学熊谷校地の調査（7）」『遺跡調査室年報Ⅶ』立正大学熊谷校地遺跡調査室
山内幹夫 1973 「比企丘陵北部発見の先土器時代資料の紹介」『史峰第2号』新進考古学同人会 pp.10-15